

子どもたちが作る、SDGs 共同宣言

松元 賢次郎

1. はじめに

2015年9月、持続可能な開発サミットで、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択され、「持続可能な開発目標（SDGs）」が世界共通目標として掲げられた。「持続可能な開発」を達成するために教育が重要であることは、古くからうたわれている¹。北村・佐藤は、SDGsを目指す現在、改めて「持続可能な開発のための教育（ESD）」を検証する必要があると指摘する。北村・佐藤はESDを通じて国際課題を「自分事」として捉える態度を育むことが重要であり、これらの態度を身につける教育を実践することにより、「社会がより持続可能なものへと変容するように働きかける人間を育てることがめざされている」と述べる²。

このような態度を育む一つの教育のあり方として、2019年に晃華学園中学校高等学校（以下本校）とマタピラ小学校（マラウイ共和国、以下マタピラ小）の間で実施した教育実践を紹介する。2019年の4月から10月にかけて、本校の中学3年生とマタピラの小学6年生の間でSDGsに関する共同宣言を作成する、「KOKA × Matapila SDGs 共同宣言プロジェクト」を実施した。この過程での作業プリントや生徒の話し合いの様子から、SDGsに関する共同宣言

を、子どもたちが主体的・民主的に作成していく教育経験が、上記の態度を涵養する可能性について論じたい。

2. 実施環境—晃華学園中学校高等学校とマタピラ小学校—

まず、本授業を実施した両校について説明する。筆者の勤務校である本校は、「他者のために」というカトリックの精神が教育活動の根幹にある女子校で、フィリピンの学費援助を目的とした献金運動や、難民支援のための古着回収活動など、国際課題に関する活動が日常的に行われてきた。

以上のような本校の国際理解教育は、国際連合でSDGsが掲げられるとさらに加速していった。2017年度より、中学3年生の社会科公民的分野を中心に、SDGsをテーマとした授業を積極的に展開するようになり、授業を通じ、「一部の熱心な生徒」だけでなく、全生徒がSDGsを知ることで、生徒たちの国際課題への関心はさらに高まった。

続いて、本授業を共に進めたマタピラ小について説明する。マラウイ共和国は、一人当たりのGNIが320ドル（2017年）であるため、「世界最貧国」とも評される。国民の多くが小規模

¹ 北村友人、佐藤真久ら『SDGs時代の教育—すべての人に質の高い学びの機会を—』「SDGs時代における教育のあり方」学文社2019年、p7

² 同前、p20

農業を営んでいるため、周辺国と比べて飢餓率は低い、文化的な暮らしを営むための物資・施設は不足しており、学校で必要な机や文房具など各種物資も不足している。

マラウイの首都はリロングウェであり、そこから南東に、車で二時間ほど進んだところにマタピラはあり、この村の中心にマタピラ小はある。マタピラも物資・施設が不足しているが、wifi環境が整備されているため、データのやりとりやテレビ電話を行うことが可能だ。ただし、プリンターがないため、本校生徒が書いた手紙をデータで送っても、マタピラ小で閲覧することは不可能であり、郵送する必要がある。

なお、筆者の友人が青年海外協力隊員（以下協力隊員）としてマタピラ小の教員アドバイザーをしていることが縁で、本授業を実施することが可能となった。

3. 授業の概要

本授業の概要を説明する。

授業時間

本校では、週1時間、80分間のロングホームルーム（LHR）が実施されている。本授業は中学3年生のLHR4回分を主な活動時間として進めた。マタピラ小では、今回の授業を行う以前から、ジェンダー、貧困、子どもの権利などをテーマに、教科を超えた横断的な問題について学習してきた。今回の授業はこの一環として行われた。

SDGsのうち6つのゴール

共同宣言はSDGsに関するものであるが、17のゴール全てを扱うことは、時間的・内容的に困難であると判断し、「1 貧困をなくそう」、「4 質の高い教育をみんなに」、「11 住み続けられるまちづくりを」、「12 つくる責任つかう責任」、「13 気候変動に具体的な対策を」、「15 陸の豊かさを守ろう」、という6つのゴールに関して共同宣言を作成することとした³。

グループ設定とゴール

両校でグループを決め、ゴールを選んでもらい、活動の基本単位とした。本校は1学年4クラスで、1クラス当たり約40名が在籍している。1クラスに6、7人のグループを6つ作り、各グループは担当するゴールを、上記6つのゴールのうちから1つ選ぶ。この時、クラス内で同じゴールを選んだグループがないようになっている。

これに対して、マタピラ小の6年生は1学年1クラスで、約80名が在籍しており、これを12のグループに分けた。そして、晃華学園と同様に、各グループが担当するゴールを上記6つのゴールのうちから1つ選び、各ゴールを学年で2グループが担当するという形になった。

手紙のやりとりと共同宣言作成過程

社会状況が大きく異なる日本とマラウイに住む子どもたちの間で、共同宣言を出すためには、互いのSDGsに関する考え方や社会のあり方を知らなくてはならない。

³ 本校では、2018年度より中学3年生がSDGsに関する動画を作成し、コンテストを行う授業を行っている。このコンテストではSDGsのゴールのうち6～7つのゴールを選び動画を作成するが、共同宣言プロジェクト実施当時、2019年度のコンテストのゴールが未定であった。共同宣言プロジェクトで選んだゴールが、コンテストのゴールと重なるチームがあると、公平性の観点から問題があると考えて、2018年度のゴールを、共同宣言プロジェクトのゴールとして選ぶこととした。

そのために、本校とマタピラ小の子どもたちの間で手紙のやりとりを行う。手紙の内容は、自己紹介に加えて、自分たちのグループが選んだSDGsのゴールが、達成されていないと考えられる身の回りの状況と、その状況を変えるためにできることである。

この手紙の内容について、ジグソー法をイメージして共有し、それを元に共同宣言を作成する。具体的には、同じゴールを選んだ両校のグループ同士で、手紙を交換し、共通点や相違点を分析。その内容をクラス内で報告し合い、それらを元に、各クラスで共同宣言を作成。こうしてできた4つのクラス内共同宣言を学年共同宣言としてまとめる。

一方、マタピラ小では、学年内で手紙の内容を確認し合い、共同宣言を作成する。そして、本校の学年共同宣言とマタピラ小の共同宣言を、一つにまとめて共同宣言の文言が決まる。最後に両校の代表者が署名を行い、共同宣言が完成する。

マラウイ委員と民主的プロセス

本校では、本授業を中心的に進める有志の生徒を募り「マラウイ委員（以下委員）」と称した。委員の果たした役割は非常に大きく、手紙が届いてから共同宣言が完成するまでの進め方や、共同宣言の内容は、ほぼ全て委員が決めた。

だが、SDGs 実現という視点に立ったとき、最も重要なことは、積極的でない生徒も含めて、一人でも多くの生徒が共同宣言を「私たちのもの」と捉えることであり、そのことが、「はじめに」で記した態度を、多くの生徒が持つことにつながると考える。だからこそ、生徒同士の話し合いや、情報共有、進捗状況の報告といっ

た、民主的プロセスを重視していった。

以下で、時間軸に沿いながら詳細を論じていく。

展開①ガイダンスとゴールに関する調べ学習

4月27日、本校で、今回の授業に関するガイダンスを行い、各グループの担当するゴールを決め、マタピラの小学生に対して質問を募った。質問は、「水道はあるか。水はきれいか」、「登下校にかかる時間は」などSDGsに関するものはもちろん、「休日は何して遊びますか」のように、一見すると関係のないものも含めて177集まった。

質問が電子データでマタピラに送られ、それを協力隊員が書き写す。そしてマタピラの小学生が、これらの質問に答えながら、自己紹介やマラウイのSDGsに関して手紙を書く。この手紙に対して本校生徒が、自己紹介と日本のSDGsの状況を手紙にまとめ、マタピラに送るという展開になる。

日本のSDGsの状況を手紙に書けるように、本授業に関する内容を、公民の授業や宿題の一環として、扱ってもらった。具体的には、自身が所属しているグループが担当するSDGsのゴールについて調べ、それをグループごとでプレゼンしてもらった。なお、公民の授業とLHRでグループを共通させている。

展開②マタピラ小からの手紙と、生徒による分析

5月14日、マタピラ小で本授業についてのガイダンス、SDGsについての説明が行われ、晃華学園に宛てた手紙が英語で書かれていった。手紙には、自己紹介と本校生徒からの質問

に対する答え、本校生徒に対する質問、担当するSDGsのゴールについて書かれていった。手紙が完成すると、データ化されてすぐに本校に到着した。

この手紙に対して、本校生徒が一人一枚の自己紹介と質問に対する答えを書き、さらにグループで一枚、担当するSDGsのゴールについてまとめ、返信としていく。

本校生徒の通学についての質問に対する、「通学距離は10km」という答えに驚くなど、様々な反応を見せながら、生徒は自己紹介を書き進める。

なお、自分が好きなものとして、アイドルグループ名など、マタピラの小学生たちが全く分からないよう内容を書いた生徒もいたが、これが思いもよらぬ展開をもたらす。詳細は展開⑥で示していく。

共通点と相違点の分析

生徒は返信を書く作業を進めつつ、担当するSDGsのゴールについて、本校とマタピラ小での共通点と相違点を、グループごとに分析する。

この時、「クラスで共有するべきマラウイの状況」という作業プリントを、教員が作成し各グループに配布することで、生徒の分析を補助した。このプリントは、スモールステップで共通点と相違点に迫れるように設問を設定した。具体的には、「設問①マタピラ小の生徒たちは、あなたの班が担当するSDGsのゴールに関して、どのようなことを課題だと考えていますか。」「設問②、①の課題を解決するために、マタピラ小の生徒たちは、どのような行動をするべきだと考えていますか。」「設問③あなたの班が担当するSDGsのゴール以外で、マタピラ小

の生徒たちが困っていること、『大変そうだな』と思うことはどのような点ですか。」と、まず、マタピラ小の子どもたちの感じるSDGsの課題や解決策を一つ一つ書き取らせる。その上で、「設問⑥マタピラ小からの手紙、公民で調べた内容を元に、SDGsのゴール実現に向けての、共通の考え方・働きかけ・行動目標・課題など、共通する部分を書き出しましょう。」と共通点を探ってもらった。

なお、「設問④、①・③に対して、私たちにはどのようなことができますか。」という形で国際課題を「自分事」としてとらえ直す設問や、「設問⑤マラウイの方が、日本よりも「豊か」だと思う点は、どのような点ですか。」といった、〈支援／被支援〉といった視点を相対化するための設問も設定している。

この作業プリントに書かれた内容を見ていく。本校生徒は、マタピラ小からの手紙を読むことで、SDGsのそれぞれのゴールが構造的に結びついていることに気が付いたようだ。設問①・③では「1 貧困をなくそう」「4 質の高い教育をみんなに」を意識して、インフラ面・文化面での貧困や教育環境に関する問題を書きとめているグループが多かった。

インフラ面・文化面での貧困

- ・水道がなく、井戸から水を運んで家にためている
- ・電気がある家とない家がある
- ・道が舗装されていない
- ・汚い水がある川の近くで生活しており、その水を飲む

教育環境に関する問題

- ・机と椅子が無い場合、床に直接座って授業を受けている
- ・生徒が大勢いるのに対して、先生は一人である
- ・落ち着いて授業を受けられない

同時に、貧困の問題が「4 質の高い教育をみんなに」や「13 気候変動に具体的な対策を」、「15 陸の豊かさを守ろう」と関連していることにも気がついた。

- ・畑仕事が忙しく学校に来られない人がいる
- ・森林伐採が深刻である。切られた木を木炭として売り、生計を立てている人もいる
- ・女の子がお金を稼ぐために売春をしている
- ・産業廃棄物が川に捨てられたり、木を伐採したり、山火事が起きたりすることで大気汚染が進行している

逆に、貧困があるからこそ、自ずと「12 つの責任つかう責任」に意識が向いている様子も書き留めていく。

- ・マタピラの生徒たちは、使えなくなったものをリサイクルしたり、修理したりして、別の使い道を考えている。モノを大切に使っている

これらを踏まえて設問⑥で、共通点を探ろうとした。「ものを大切に使ったり、リサイクルしたりすること」といった、漠然とした共通点を発見することは出来たが、具体的な行動のレ

ベルでは、相違点ばかりが目立ってしまった。

- ・彼らは自身の物資が不足しているため、物を買うための資金作りを問題としているが、私たちは物が余ってしまうほど所持しているため、寄付やリサイクルすることがゴール実現への行動である。ゴール実現への行動が、環境の違いにより異なってしまったため、共通する行動を見つけることは難しかった

展開③「対等」という感覚・テレビ電話の実施

手紙が読んだ後、委員を集めマラウイ委員会（以下委員会）を複数回開いた。委員会は、共同宣言の進め方について決めるための場とする予定であった。

しかし、始まってみると、マタピラを支援するための企画が、生徒から次々と提案された。例えば、文房具を回収してマタピラに送りたいという意見、または、マタピラの小学生が、放課後、遊びながら親の帰宅を待つため、その時にできる遊びを教えたいという意見など。このような提案が出された背景には、生徒たちが手紙を読み、実際につながっているという感覚を持ったことや、「クラスで共有すべきマラウイの状況」の「設問④」で、本校生徒に出来ることを聞いていたことがあったのであろう。

このような支援を前提とした議論が盛り上がる中、「共同宣言を出す以上、対等な立場であるべき。上から目線で支援をするという関係はおかしい。支援をするのは、マラウイの問題を理解し、共同宣言をしっかりと出してからで良いはずだ」という意見が、一部委員から出された。

この意見に対して、その他の委員から異論はなく、まずは対等に共同宣言を出し、互いに理解を深めた上で、支援を行っていかうという形で会議はまとまっていった。

対等という感覚が、各クラスに複数名いる委員に共有されたことの意味は大きい。実際、この後の共同宣言作成の過程でも、〈支援／被支援〉という文脈を脇に置き、マラウイがどのような状況になっているのかを、理解しようと努める場面が何度も見られた。

同時に、大きな問題も浮上した。マラウイの状況を理解したくとも、手紙だけではその情報が圧倒的に不足しており、このままでは共同宣言を出せないという不安の声が上がった。そこで、委員たちの要望を受け、急遽、協力隊員と本校の生徒の間でテレビ電話を行うこととなった。

テレビ電話は30分程度であったため、事前に協力隊員に質問事項を伝えることで、より多くの情報を得ようということになった。委員はクラスで質問を募り、それを教員がデータ化し、協力隊員と共有。質問の内容は、手紙の内容の補足を求めるものもあれば、「マラウイとの交流で、マラウイの子たちはどのような気持ちか」など、マラウイの人々を支援の対象とみなすのではなく、一人の人間として尊重するような質問が集まった。

こうして、6月20日に7時間の時差を越え、協力隊員と、有志の生徒20名程度によるテレビ電話が実施された。生徒は、教員が作成した質問一覧を片手にメモを取りながら、電話に聞き入っていた。終了後、委員たちは、次は子どもたちと電話したいと申し出てきた。

展開④共同宣言作成のための事前準備 生徒自身による資料作成

以上のように、手紙やテレビ電話で得た情報を元に、各クラスで共同宣言を作成する。クラス内共同宣言を出すLHR(6月22日)の進め方、内容の決め方、内容そのもの、これら全てを委員に任せ、当日、教員は一切関与しないこととした。

当日、より良い共同宣言を作成するために、委員はクラスを越えて協力し事前準備を進め、教員はその補助を行った。ここではその内容や様子を記していく。

委員は事前準備を進める中で、LHR当日の流れ、当日の作業プリント、共同宣言の骨格、テレビ電話の内容の説明という4点に関して、委員自身でプリントやスライドを作成し、クラスを越えて共有することを決定していった。委員は、共有することで、各クラス内共同宣言を学年共同宣言にする際に、よりまとめやすいと考えたようだ。

LHR 当日の流れ

当日の流れに関しては、まず教員の方で、「6月22日の計画」というプリントを作成し、委員に渡した【資料1】。これは、LHR当日の展開や、事前に必要なものを計画するためのプリントである。これを各クラスの委員に配布し、80分間の展開を考え提出してもらい、教員が添削した。添削したもののコピーをその他の委員にも配布することで、起こり得るトラブルや注意すべき点を、4つのクラスで共有してもらった。

各クラスから出された「6月22日の計画」を踏まえて、委員がLHR当日の流れを作成し

た。展開⑤では、この流れに沿ってクラス内共同宣言の作成過程を記していく。

共同宣言の形式、作業プリント、骨格

共同宣言の形式は、委員会により決まっていた。手紙の内容を踏まえると、環境や経済に関する違いが明らかことから、全く同じ行動目標を宣言することは困難であると、委員は捉えた。そこで共通する「宣言」部分を作りつつ、「行動目標」は両校でそれぞれ違うものにするということが決まった。

その後、この形式を前提にしつつ、委員が、クラス内共同宣言作成当日の、グループワークで利用する作業プリントを作成【資料2】。このプリントには二つの工夫がある。ただ単に「行動目標」を考えるだけでなく、その理由についても記入を促すことで、クラス内共同宣言作成当日の議論がかみ合うようになっている。また、「行動目標」を「参考に、宣言を考えてください」とあり、「行動目標」と「宣言」が関連するようになっている。

このプリントに加えて、共同宣言の骨格も作成【資料3】。「私たち晃華学園中学校3年生・マタピラ小学校6年生は、」「を、実現するために」などと、骨格となる文言が決まっている。

テレビ電話の内容の共有

中学3年生全体での、マラウイに関する情報の差は、テレビ電話以前にはそれほど大きくはなかった。しかし、テレビ電話を実施したことにより、テレビ電話に立ち会った20名弱とそれ以外の生徒で、明らかな情報の差が生まれた。

そこで、委員がテレビ電話の内容を共有するためのスライドを作成。また、スライドの補助のために穴埋めプリントも作成していった【資

料4】。このプリントは、教員が作成したテレビ電話での質問一覧のデータに、委員が協力隊員の解答を打ち込み、そのうち要点を空欄にしたものである。

以上のように、委員により事前準備が進み、クラスを越えて共有され、クラス内共同宣言作成当日を迎えた。

展開⑤晃華学園の共同宣言作成過程

ここでは、委員が作成したLHR当日の流れに沿って、共同宣言作成過程を記していく。もちろん、実際の動きは、各クラスで異なる部分がある。

冒頭、共同宣言作成の目的が、作成そのものにあるのではなく、共同宣言の内容を踏まえてSDGsの課題解決に進んでいくことであるということが確認された。

その後、情報共有を行う。一つ目に、「クラスで共有するべきマラウイの状況」を活用しながら、マタピラ小学校からの手紙で知り得た事実を共有する。既述の通り、各グループ、自分の班が担当するSDGsのゴールと、同じゴールのマタピラ小からの手紙しか読んでいないからだ。なお、この時、マラウイについて自主的に調べ、そこでの内容を共有したクラスもあった。

続いて、委員がテレビ電話の内容について、スライドを用いながらプレゼン。テレビ電話に立ち会えなかった生徒たちは、穴埋めプリントを埋めながらプレゼンを聞いた。委員が「マラウイは経済的には豊かでない部分もあるかもしれないが、心の温かさなど、精神的な面では日本より豊かかもしれない」と、テレビ電話の内容を紹介すると、「確かに」という反応もあった。

情報共有後はグループワークに移行した。委員作成の作業プリントを用いながら、行動目標を各グループで考える。その際、「発展途上国と先進国の違い」「SDGs 達成のために必要なこと」「私たちにできること」といった視点で考えることが指示された。

共有した内容や、各自で調べたマラウイの情報を参考にしながら話し合いが進む。その上で、各班がそれぞれ意見を出し、委員がこれを黒板にまとめ、文言を吟味しながら合意に向かい、各クラスで共同宣言完成を目指した。

しかし、6月22日のLHRではクラス内共同宣言は完成せず、翌週のLHR(6月29日)の冒頭20分間用いてクラス内共同宣言が完成した。流れや骨格をそろえたにも関わらず、当然ながら各クラスの共同宣言は全く異なる。各クラスの共同宣言は以下である。

A組案

前文

このアジェンダは、持続可能な開発のための行動計画である。また、貧困により、夢を諦めなければならない人が多く存在することが大きな課題であり、持続可能な行動のための必要条件であると認識する。

晃華学園中学校に在籍する中学三年生及びマタピラ小学校に在籍する小学6年生は、パートナーシップの下、この計画を実行する。

宣言

我々、晃華学園中学校3年生及びマタピラ小学校6年生は、2019年4月27日から6月29日までそれぞれの学校で会合し、今日、すべての人が平等な機会を持ち、平和で安定

した社会を実現させるため、新たに持続可能な行動目標を決定した。

晃華学園の行動目標

1. 先進国に生きる者としての使命

発展状況の違う国の集まりである世界において、他国の「仲間」の存在を忘れず、広い視野を持ち、何人たりとも、一人で生きていくことはできないことを再認識し、特に先進国に生き、食料、教育、衛生環境を十分に得て生活している者として、募金活動や衣服、文具の寄付により、世界中の「仲間」が幸せに生きるための援助に取り組む。

2. 今回のプロジェクトの活用

今回のプロジェクトにより、得た知識、我々自身のうちに築かれた信念を世界に向けて、発信することを決定した。先進国と発展途上国の両国を知る者として、MDGsの反省を踏まえ、SDGsの活動は勿論、各国の状況や、我々も持つ浄水や耕作の知識を活かし、世界中の仲間と情報共有を目指す。

3. 子供としての可能性

我々は10代であり、紛れもない「子供」であるが、だからこそ、国境を越え、相手のことを思いやるストレートな関係を築くことができるかと確信する。

あらゆる権力に頼らず、翻弄されず、この地球で自分と世界中の仲間の誰一人をも見捨てず、持続可能な世界を築くために、この共同宣言を最大限に活かし、行動することを宣言する。

4. マタピラ小学校との協同的なパートナーシップ

見華学園中学校3年生及びマタピラ小学校6年生は、世界に視野を広げ、夢を持ち、地球規模の持続可能な行動目標を達成できるのは、我々、人間だということを再認識し、他国の存在を知った上で、国際的な協力が出来るということに留意する。

そして、森林の伐採など、それらの行動が地球に及ぼす影響を知り、それらを防ぐために協同的なパートナーシップの下、持続可能な行動目標に取り組むことを宣言する。

このクラスは、実際に国際機関で採択された共同宣言を参考に、言葉遣いや文言に注意しながら、「前文」「宣言」「行動目標」という形式をとった。行動目標に関しては、「先進国」の「子供」だからこそできること、そして今回のようなプロジェクトを進めた立場だからこそできることなど、自分たちにしかできないことを模索している。

B組案

宣言

私達見華学園中学校3年生、マタピラ小学校6年生は、互いの自然的、社会的環境改善を実現するため、問題の認識が不足しており、認識の向上が必要であるという考えに基づき、大人への情報発信を実現していくことをここに宣言する。

行動目標

技術者や講師の拡充に対する再認識を二か

国間に要請し、互いの環境問題を深く学び、周囲の人に伝える必要性を再認識し、生活的環境の物質と自然との共存へ向けた知識を共有し、保存性の高い種子を送り合う事を通し植物の栽培を進め森林伐採の問題解決に向けて努力し、先進国にエコへの取り組みを促進することを要求して国連に貧困国への援助の拡充を要求するために努力する。

このクラスは、宣言部分の「大人への情報発信」という点が特徴的である。子どもは「これは実現できない」という限界を知らないからこそ、アイデアを生み出すことができる。逆に、大人には子どもにはない「力」がある。だからこそ、大人に対してSDGsについて情報発信することが、子どものできる効果的な方法だと考えたようだ。行動目標の種類が多く、シンプルに箇条書きでまとめている点も特徴だ。

C組案

宣言

互いの文化を知り、共有、尊重し合い、両国の暮らしをより良いものにする

行動目標

- ・ 手紙を送り合う
- ・ 両国の遊びを送り合う
- ・ トウモロコシ粉を使った料理を教える
- ・ 文化をプレゼン

このクラスは、話し合いの中で、「文化交流による相互理解が、SDGs 実現のための大きな基盤となる」ということが全体の意見に

なっていた。4クラスの案の中で、一番シンプルな案ではあるが、文化交流による相互理解という点が際立って居る。

D組案

宣言

私達見華学園中学校3年生、マタピラ小学校6年生は、先進国と発展途上国の格差を是正し、SDGsの目標のもと、世界の環境をよりよくすることを実現するために、各国の文化や現状を把握し、国境を越えて一つになり、目標に向けて取り組むという考えに基づき、次の行動目標を実行していくことをここに宣言する。

行動目標

- ・ 日本での移民、難民に対する偏見の撲滅を目的にSDGs新聞を発行する。またそれをマタピラ小学校と交換し合い、相互理解を深めることを提案する。
- ・ 先進国と発展途上国の枠を越え、環境保全と情報共有を目的に本と種の交換を推奨する。

このクラスは、「格差を是正」「国境を越え」という言葉に見られるように「対等」という視点で共同宣言作成に取り組んでいる。

以上の4つの共同宣言を持ちより、委員全員が1か所に集まり、学年共同宣言を作成していく。

最初は、共同宣言の形式に関して議論が進められた。A組が、実際の共同宣言をベースにしながら共同宣言を作成したことを根拠に、「前

文」「宣言」「行動目標」の形式で進めることを提案。これに対して、B組が「前文」「宣言」「行動目標」の形式については同意しつつ、A組のような文章式の行動目標ではなく、B組のように箇条書きの方が整えやすいのではと提案。

形式に関して、最終的には次のことが決定された。

- ・ 前文はA組のクラス内共同宣言を基本とする。
- ・ 宣言はB組のクラス内共同宣言を参考にしつつ、他クラスの意見を集約し修正を図る。
- ・ 行動目標は箇条書きとする。

続いて、前文について話し合いが進んでいった。C組から、文化交流についての話し合いが活発にあったため、この点を前文に組み込みたいという意見が出された。D組からは格差を無くすということに明言したいという意見が提案され、「平等」という言葉が盛り込まれた。

言葉の一つ一つ選ぶ中で、共同宣言によって最終的に目指すべき到達点がどこなのかを、生徒たちは自然と考えるようになった。到達点が明確できていなければ、言葉を選ぶことができないからだ。彼女たちの共同宣言での最終的な到達点は、戦争も貧困もないという意味での「平和」であり、この点についても前文に盛り込まれた。

続いて、宣言について話し合っていた。B組の宣言にある「自然的、社会的環境改善を実現する」ためには、途上国や先進国といったカテゴリーや、国家の枠にとらわれないことが重

要であるという意見が出された。また、前文でも強調された文化の交流について言及するべきという意見が出され合意された。なお、B組の宣言にあった大人と子どもの関係については、委員は納得した様子であった。

こうして、前文と宣言に関して概ね案が完成し、各クラスで途中経過が報告された。この後、行動目標についての話し合いが、委員会により進められていった。

展開⑥ビデオとテレビ電話

同じ頃、20日以上かけて、晃華学園の手紙がマタピラ小に到着し、手紙を読む様子がビデオで送られてきた。ビデオには、一生懸命本校生徒の名前を発音するマタピラの小学生の様子、また、本校生徒が書いたアイドルグループの映像を、協力隊員がパソコンを使ってマタピラの小学生に見せている様子が写されていた。この映像が、学年集会で本校生徒の前に移し出されると、驚きの声が上がった。この時、マタピラとのつながりを強く感じた生徒も多かったようだ。

さらに、両校生徒の要望に答え、7月11日、子どもたちによるテレビ電話が実現した。約2時間のテレビ電話のうち、冒頭の30分間は名前の呼び合いであった。本校生徒が自己紹介すれば、マタピラの小学生が一斉にその名前を呼び拍手。マタピラの小学生が自己紹介すれば、本校生徒が一斉にその名前を呼び拍手。名前を呼び合いだけであるため、共同宣言に関する情報は全く得られないものの、お互いの存在を確認し合うような時間であった。

その後、本校生徒の「休みの日は何をするの

か」という質問に対し、マタピラの小学生が「手伝いをして一日が終わる」と言った返答があるなど、いくつか質問のやりとりが行われた。

展開⑦共同宣言の完成

テレビ電話の翌日、マタピラ小学校でも共同宣言の行動目標部分の作成が始まり、7月16日に完成したものが本校に到着。委員はマタピラ小学校の行動目標を踏まえて、既に作成していた宣言部分を修正した。そして遂に、「Joint Declaration of the Junior high school of Koka Gakuen and Matapila primary school (晃華学園中学校・マタピラ小学校共同宣言)」が完成した。本文は英語であるが【資料5】、次頁では日本語訳版を紹介する。

晃華学園中学校・マタピラ小学校共同宣言

前文

このアジェンダは、持続可能な開発のための行動計画である。
貧困により、夢を諦めなければならない人が多く存在する世界を変えていけるよう、
すべての人が平等な機会を持ち、文化を互いに尊重しあい、平和で安定した社会を実現させること
が必要条件であると認識する。

宣言

私たち晃華学園中学校3年生・マタピラ小学校6年生は、
互いの自然的環境、及び格差は正などといった社会的環境の改善を実現するため、
国家の枠を超えて国際問題を捉えることが必要であるという考えに基づき、
それぞれが一市民としてコミュニティに属し学び続けるとともに、
大人への具体的な情報発信及び文化の共有、尊重を実行していくことを
ここに宣言する。

行動目標（マタピラ小学校）

私たちマタピラ小学校6年生は、日本との交流を通じて、課題解決のためのアクションを考えました。

1. 私たちは、より多くの木を植えます。マタピラにおいても、日本においても、世界のどこにいても、木は私たちにとって生活や健康に欠かせない大切なものだからです。
2. 私たちは、責任ある市民であるために、学校で沢山勉強します。責任を持ってコミュニティに属し、社会に関わり、より良い世界をつくる一人の市民として、勉強し続けることはとても大切なことからです。
3. 私たちは、壊れてしまったものを、リサイクルして何度も使います。私たちはこれまで、モノがなければ手作りし、壊れれば直し、一つのモノを長い間使うということをしてきました。
しかし、自分で直せないもの、古くなってもう使えないもの、例えば最近では、皆が履いているプラスチックシューズなども、リサイクルしてまた新しい製品に生まれ変わることができるのです。
自分で直せないものは、リサイクル業者に責任を持って受け渡します。
4. 私たちは、私たちの環境を清潔に、美しく保つ努力をします。私たちのコミュニティ、国、地球がずっと、私たちにとって住みやすい場所であるために、私たちには環境を清潔に美しく保つ責任があります。

行動目標（晃華学園中学校）

1. 国連に貧困への支援の拡充を要求するために努力し、
2. 募金活動やその他の寄付を通して、世界中の人々が幸せに生きるための援助に取り組み、
3. 技術者と講師の拡充のため、自らも学び続け教育の知識を増やし、
4. 各国政府にインフラ整備の重要性を強調し、
5. 生活的・環境的物質と自然との共存へ向けた知識を共有し、
6. 新エネルギー源の確保を二カ国に勧め、
7. 森林伐採の撲滅ならびに植樹の重要性を留意し、
8. 浄水、耕作を新たな知識として共有し、

本アジェンダにおいて、私たちが得た知識を伝える必要性を再確認し、
先進国と発展途上国の枠を超え、環境保全と情報共有を目的に行動する。

内容について解説する。まず、マタピラ小の行動目標に関しては、マタピラの小学生が作成した英語の行動目標が、協力隊員の手で日本語に直され、それがそのまま行動目標として組み込まれている。

前文に関しては、委員が展開⑤で決めた内容の文言を整えたものとなっている。宣言に関しては、委員が既に作成したものに、マタピラ小の行動目標を踏まえて修正がなされた。具体的には、「それぞれが一市民としてコミュニティに属し学び続けるとともに」という文言が加わっている。委員が、マタピラ小の行動目標と、本校のものとを比べた際、コミュニティとの関係が強く打ち出されていることに気が付き、宣言部分を修正することになったのであった。

こうして完成した共同宣言は7月20日、本校中学3年生の前で、委員の代表者により読み上げ及び解説が行われた。解説では共同宣言のどこの部分に、どのクラスの想いが込められているのかが確認されているとともに、「この共同宣言はマラウイ委員が作ったのではなく、晃華学園の中学3年生とマタピラの小学校6年生全員によって作られた共同宣言。そして宣言を作って終わりではなく、実現のために行動をして行くことが重要だ。」ということが確認された。

その後、クラスの代表者2名ずつ、合計8名が英語で署名し、共同宣言がマタピラ小に送付された。7月21日には、マタピラ小で電子データを用いて、英語版の共同宣言の読み上げ式が実施され、最後に、“Clap your hands for everyone in classroom. Clap your hands for KOKA learners too.”と、協力隊員が言うと、教室は

大きな拍手に包まれた。

その後、夏休みの明けた9月、マタピラ小でも共同宣言の署名が行われ、3名の代表者が署名。共同宣言のうち一つがマタピラ小に保管され、もう一つは本校に送付された。そして、10月の半ばに共同宣言が晃華学園に到着し、本校に保管されている。こうして、共同宣言を作成するという意味では、この授業は終了した。

4. 本実践の教育的意義

まとめとして、本実践が、「はじめに」で示した態度をどの様に涵養し得るのかを論じていく。

まず指摘すべきは、国家の枠を越えて子どもたちが共同宣言を結ぶという教育が、相手を理解したいという意欲を喚起するという点である。経済や環境に関する状況の異なる二国間の子どもたちが、同じ言葉で書かれた文章を合意するためには、互いの状況を知ることが絶対的に必要であるからだ。これに加えて、共同宣言に取り組むことによって、両国の子どもたちは〈支援／被支援〉という関係から、共同宣言を結ぶ「対等」なパートナーという関係になっていった。このことは、マタピラの小学生を「支援の対象」と見なす文脈を一旦脇に置き、どのような現実があるのかを理解しようという態度を促した。

さらに、生徒の主体性を重視したことが、理解したいという生徒たちの意欲をさらに強めた。教員からの手助けはもちろんあったが、委員が自ら考えて進める立場となったからこそ、宣言作成当日を迎える前に、情報が不足していることに委員自らが危機感を持った。そのこと

が、テレビ電話を求める声につながった。なお、委員の主体性は、他の生徒の主体性をも喚起した。本授業に消極的であったある生徒は、委員の主体的な姿を見て、自身も主体的に関わろうと考えたという。

そして、理解をするための方法が、子どもたち同士の手紙やテレビ電話であったことが、両校の子どもたちを「友達」にした。手紙とテレビ電話の本来的な目的は、SDGsに関する情報の交換であったはずだ。だが、手紙で好きな食べ物を書き合ったり、テレビ電話で相手の名前を呼び合ったり、子どもたちは「脱線」を大いに楽しんだ。大人たちが重視しないこれらのやりとりが、両校の子どもたちの距離を縮め、名前を知り、顔も分かる「友達」同士となり、より一層「対等」な関係となった。

なお、この点はマタピラ小にも指摘出来る点だ。本授業開始直後、マタピラの小学生は「日本からどのような支援をしてもらえるのか」ということを期待し、〈支援／被支援〉という枠組みで今回の授業を捉えていた。しかし、手紙やテレビ電話を通して、「日本にマラウイの文化を知ってもらいたい」、「手作りに箸を送りたい」など、上記の枠組みから脱し、「友達」となるような雰囲気が醸成されていった。

その上で、この共同宣言のテーマがSDGsであるという点が重要だ。「友達」が、貧しさのために学校に通えない日があるということ、もしくは机の無い環境で勉強していることを考えた時、「1 貧困をなくそう」や「4 質の高い教育をみんなに」は、もはや「他人事」ではないだろう。

しかし、SDGsに関する共通点を探ろうとし

ても、見えてくることは「私達には捨てるほど物があるのに、マタピラには物がない」というコントラストである。そしてこのことが、自身の生活が国際課題の遠因になっている、あるいは、自身の生活を変革することが、国際課題を改善することにつながり得るということに気づかせた。委員ではないある生徒は、マタピラへ「We give you pencils!! Please use them!!」と返信し、自主的に学年に呼びかけ、鉛筆の回収を行った。また、授業後のふりかえり用紙に、多くの生徒が食物廃棄量の削減、温室効果ガス対策としての移動手段の見直し等、さまざまな具体的な行動を記した。それだけでなく、学校を越えた文房具回収、ぬいぐるみ回収、教員へのフェアトレードコーヒー採用の要望など、多くの企画が実行された。

自己の生活が、国際課題と結びついているという感覚は、マタピラの小学生にも育まれていった。それはマタピラの行動目標からも読み取れる。マタピラの子どもたちの中には、マタピラから出ずに大人になり、一生を終える子どもも多いそうだ。そのような子どもたちの行動目標に、「地球」という文字が掲げられたことが、その証左と言えよう。

「授業の概要」で述べたように、一人でも多くの生徒が共同宣言を「私たちがもの」と考えられるように、委員たちに助言をしたつもりである。一方、上記のような態度を全ての生徒が身につけたとは、もちろん言えない。だが、今その態度が身につかなくとも、マタピラの子どもたちとつながった経験、共に活動をしたという経験が、将来そのような態度を引き出すことを期待したい。

5. 終わりに

この授業を始めた際、これほどの宣言が出来るとは思いませんでした。教員が主導し進めていたら、これほどの宣言にはならなかったはずだ。この意味で、展開⑤で記した「子どもたちは限界を知らない」という生徒の意見は示唆的だ。彼女たちの言う「大人」として、共同宣言作成過程に立ち会った者として、この宣言を深く心に刻み行動しなくてはならない。

最後に、この宣言に関わった両校の子どもたち、そして、共に教育活動に携わることが出来た協力隊員であり親友である、長井優希乃に感謝する。

※本論文は、本校公式ブログを大幅に加筆修正したものである。また、朝日新聞朝刊東京面（2019年10月3日）でも取り上げられた。

<参考文献>

北村友人、佐藤真久ら『SDGs時代の教育—すべての人に質の高い学びの機会を—』「SDGs時代における教育のあり方」学文社2019年

<資料>

6月22日の計画	
90分間の時間を全て使い、質の高い学習内共同宣言を各自に、熟考して欲しい。	
【事前準備】	
① 6月22日までに、クラスの友人に対して書いて欲しいことがあれば記入。	
② 6月22日に、クラスの友人に持ってきて書いて欲しいもの（イラスト・書状など）があれば記入。	
③ ①、②がある場合、クラスの友人に一つ一つのように連絡するのがある。	
【取組の目的】	
① 笑顔の中での活動をお互いに記入してください。（裏面の記入例を参考にしてください）	
② 意見をどのようにしたいか、進捗の進捗でない場合は、以下に書いてください。	
③ 6月22日の履修に関して、クラスの友人に協力して欲しいことはありますか（書状など）。	
【その他】	
① その他何かあれば	
時間	やること
	マタピラクラス代表・協力者の動き
中学3年 組 代表者 ()・()	

<資料1>

用で考えた行動目標	なんでその行動目標なのか。
・	
・	
・	
・	
・	
上で書いたことを参考に、宣言を考えてください	

<資料2>

KOKA X Matapila SDGs 共同宣言
宣言
私たち尾懸学園中学校3年生・マタピラ小学校6年生は、
を、実現するため、
という考えに基づき、
を実行して行くことをここに宣言する。
尾懸学園の行動目標
上記の宣言を、達成するため、私達は、以下の行動を行う。
・
・
・
2019.6.22
尾懸学園中学校 中3

<資料3>

<p>1. マラウイの人は日本と交流することをどのように思っているか → がないが、にしている。同じ年の、が欲しい</p> <p>2. 今までにSDGsについての活動を行ったことがあるか → 今回が、でもSDGsも知っている人いる</p> <p>3. SDGsの活動に積極的に参加しているか →、というマラウイ独自の成長目標、SDGsの目標が現地語に訳されたしかし、一般の人にはまだ浸透していない</p> <p>4. SDGsに向けてマラウイで行っていることはなにか → は特に、について解決しようとしている、はそもそも知らない人が多いしかし、できる範囲でやろうとしている 、人が支援してくれているという考え方が強い</p> <p>5. SDGsを広めるためにしていることは → まったく、SDGsについて知ったのは今回が初めて</p> <p>6. なぜ日本の学校と共同宣言を出そうとしたのか → 日本ど、をしてみたい、を豊かにする、を広くもつ</p> <p>ゴール15に関して 7. マラウイからの手紙で「土地が石でいっぱいになるからどかきなければいけない」と書いてあったのはなぜか → 畑が、は作物がとれること</p> <p>8. マラウイの自然環境はどのようなものか → 北部は、湖がある、マタピラは、木がある、とて</p> <p>ゴール11に関して 9. 本場に貧困なのか →、小学校の学費は、だが、セカンダリースクールは学費がかかる助け合って生きている、では 10. マラウイで困ることは</p>	<p>11. マラウイの医療環境はどのようになっているのか → 薬はあるが</p> <p>12. 男女で貧富の差はあるのか → あまりない あるのは、との貧富の差</p> <p>13. マタピラ小学校に通う子は比較的裕福か →、に比べれば 学校に通えていない子よりは裕福</p> <p>14. マラウイに経済格差はあるのか → は裕福な人が多い マタピラでも少し、はある</p> <p>ゴール11に関して 15. マラウイの都市部はどのような場所か → 官邸は、く がある</p> <p>ゴール4に関して 20. 学校はいくつあり、どのくらいの距離にあるのか → 小学校は、 く、い歩く</p> <p>ゴール13に関して 23. マラウイの気候は、また気候的な変化はあったか →、はある 、で料理するため、が行われている もある</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<資料4>

Joint Declaration of the Junior high school of Xoka Gakuen and Matapiá primary school

July 20, 2019

Preamble

This agenda is an action plan for sustainable development. We should respect each other's culture, and improve the situation in which there are many people who have to give up their dreams due to poverty, so we all need to recognize the necessity of having equal opportunities and peaceful and stable society

Declaration

We declare here to have a collaborative project between the 3rd Junior high school of Xoka Gakuen and the 6th grade of Matapiá primary school in order to improve our society, improve natural environment, and eliminate the gap beyond the border of the countries. In order for each of us to keep on learning as a citizen, it is important to recognize the international problems, share mutual cultures, and share more information among us.

Action Plan (Matapiá primary school)

We decided our action plan to achieve the goals through communication with Japanese learners.

- We plant more tree: Trees are important in Matapiá, in Japan and anywhere in the world. It's important and necessary for our life and health.*
- We study hard in school to be responsible citizens.*
- It's very important to keep studying as a citizen to belong to the communities, to connect to the society and to make the world better.*
- We recycle old and broken things to use not only again and again, but also long time. We've been producing hand-made items when we can't have the actual items, and if it's broken we repair to use it long time. For example, the plastic shoes which we wear everyday can be new products by recycling. If there's something we can't repair by ourselves, there are agents who can do recycling on behalf of us, so we give it to them with responsibility.*
- We make steady efforts to keep our environment clean and beautiful. To keep long our community, our lands, our earth to be good place to live, we have responsibilities to keep our environment clean and beautiful.*

Action Plan (Junior high school of Xoka Gakuen)

- Do our best to demand the United Nations to support people in need.*
- Try to make people around the world happy through our fundraising and donations.*
- Continue to study for more knowledge in order to increase the number of engineers and teachers.*
- Make the government of each country recognize the necessity of proper infrastructure.*
- Share the knowledge of life and environment.*
- Request governments to secure new energy resource.*
- Recognize the importance of stopping deforestation and planting trees.*
- Share knowledge on clean water and cultivation.*

We carry out these action plans beyond the framework of developing countries and developed countries for the improvement of our environment and the sharing of information

<資料5>